

# 双星夢翔る

2人のメジャーリーガー

## メジャー変えた大谷①

## ① 第7部・世界一を目指して③ ①

# 新ルールさらに躍進

好意的なMLB。その理由をスポーツジャーナリズムが専門の神田洋・江戸川大教授(57)は「投打とも飛び抜けており、両方で1番の可能性があったからだろう」とみる。

誰もが二刀流の活躍を見たい。ファンの期待に応えることはMLB側も収入増に直結する。面白いことが起こるなら、ルール変更に抵抗のない米国の国民気質もあり「より面白くなった」、多くの人が楽しめるなら変えるのが米国。そして簡単に変更ができるのは野球ならではの」と語る。

他のスポーツと違い、国際競技連盟でルールを改正する仕組みではない。MLBが先行し、各国が追随す

大谷翔平の活躍を「日本人のイメージを変えた」と語る神田洋教授



る。降板後もDHで継続出場できるルールも23年春のワールド・ベースボール・クラシック(WBC)で採用され、日本も同年から始まった。

マウンドを降りて守備に就かない限り、打席に立ってなかった大谷は新ルールで打席数が増加した。「日本時代はない動きだった。米国の方が柔軟な対応をしてみらえてるのかなど、ありがたい気持ち」。こう感謝を口にした22年は15勝、34本塁打をマーク。打球回、打席のダブル規定数到達は1903年以降の現行メジャーで初の快挙だった。2023年は日本人初の本塁打王を獲得し、名実ともにスーパースターとなった。

背番号17が変えたのはルールだけではない。共同通信社記者として、大リーグを取材した経験がある神田は「戦前から続く『日本は打撃が弱い』という米国の見方や、サイズやパワーで劣っているという日本人が持つアイデンティティーすら変えた」と指摘する。

柔よく剛を制す。体格や力でも劣っても、技術で上回る。日本人に根付く意識だ。イチローや松井秀喜が活躍しても変わらなかった日本野球のイメージ。大谷は100㍻(約161㍻)の剛速球を投げ、米国が最も誇るパワーの象徴である本塁打を連発し、日米の景色を一変させた。

(敬称略、運動部・斎藤孝也)

「野球の神様」ベーブ・ルースに比肩する大谷翔平(29)の活躍は歴史だけでなく、競技のルールすら変えてきた。メジャー3年目の2020年、米大リーグ機構(MLB)は二刀流選手登録を新設。投手で負傷者リスト(IL)入りしても、野手として出場できるルール改正は、18年に右肘を手術し、二刀流復活を懸けた背番号17に追い風となった。

「大谷ルール」と呼ばれる改正はこれにとどまらない。初出場した21年7月のオールスターは特別ルールが採用され、先発投手と1番・指名打者(DH)として史上初の二刀流出場を果たす。22年は打順に入った先発投手が、降板後も指名打者で出続けられる新ルールが導入された。

海を渡ってきた挑戦者に

「大谷ルール」が導入された2022年、投打の両方で規定数を達成した大谷翔平